

# ニュージーランド・スキー (8/25 ~ 9/2)

清宮政宏  
武部慎

## その1. 日本脱出

日本との時差はプラス3時間だが、日本では真夏の8月、南半球の New Zealand では真冬となる。グレンにホロシャツ姿で成田を発つて、約10時間 AIR NEW ZEALAND の機内食やドリンクサービスには満足しながらも、よく眠れぬままで到着したニュージーランド最大の都市オークランドの朝は肌寒く、くもりと雨とではじまった。

## その2. KIWI ENGLISH.

さて、ニュージーランドに着いて、我々がすぐにやさしくではなくこととは、タスマン氷河滑降のためのセスナ機の予約であった。そこで、さっそく KIWI ENGLISH と対面することとなる。空港の INFORMATION で、“MOUNT COOK AIRLINE のフロントはどう”と単純な質問をしただけだったのに、相手は、かなりなりの強い発音の高齢の女性で、お互いに言ひ合いでいることがよく理解できない。おまけに、我々はスピードと勘違いされたのか“これからどこへ行くの、エアーチケットをみせこどんなさい”など話がどんどん複雑になってしまった。

いよいよと詰すうちに、やとお互いが言ひ合いでいることが理解できるようになり、“今あなた方がいるのは国際線ロビーで、Mt Cook LINE のカウンターは、国内線ロビーに行かなくてはならない。すぐ前から連絡バスが出ている。2ドルかかる”といわれ、ようやく我々も納得。タスマン氷河のセスナのフライトの予約と、日本へ帰るフライトのリコンファームを行ふことになった。

KIWI ENGLISH は、QUEEN'S ENGLISHなどではなく、あまりはかなり強く、このあとも、“It's a good day for skiing.”などの day を [dei] ではなく、[da:i] と発音するところなど、はじめの3日間くらいは、独特の発音を持つ KIWI ENGLISH にとまどいかがちだった。

## その3. New Zealand の道路事情。

夜のフライトにて北島のオークランドから南島のクライストチャーチへと渡った。我々は、翌朝より、日本ですでに予約してある AVIS レンタカーでカローラをかり、マウントクック村に向けて出発した。クライストチャーチからマウントクック村まで

は、約300Kくらいあり、日本での感覚でいえば「山に行きも1日がかり」にあ  
るてしまうのが、国道でも、街中でなければ平均時速120Kくらいのス  
ピードでとばすことのできるニュージーランドでは、マウントカックまでの途中に  
あるゲレンデ、TEKAPO SKI FIELD で、滑る勘を戻すために約2時間く  
らい過ぎる余裕さえあつた。

#### その4. LAKE TEKAPO と TEKAPO SKI FIELD.

限りなく水色に澄んだ湖と遠くには頂上からに雪をいたたいた山。そして、  
湖畔には小さな小屋がある……旅行代理店のオセアニアツアーズのパンフレット  
には、そんなニュージーランドの写真が、かならず一枚くらいはの、といふ。それは、  
まず、まちがいなくテカポ湖である。

まるごとおとぎの国の物語にてくる湖のような色を持つテカポ湖といふに、  
国道から舗装された道を30数K、車では約40分のところに、テカポスキーフィールド  
場はある。

ニュージーランドでは、どこのスキーフィールドもどうなのだが、日本のように、ホテルを出発は  
すぐ「ゲレンデ」というようなスキーフィールドではなく、宿泊するホテルなどのある町から、林道のよう  
な山道を車で1時間くらい登ったところにあるのが「普通」である。そのためか、  
雪質はとてもよく、気持ちのよい滑降を楽しむことができる。しかし、一度天候が  
くずれると、スキーフィールドは完全にクローズされてしまい、スキーができる確率は60~70%  
くらいである。

余談ではあるが、QUEEN'S ENGLISHでは、スキーフィールドを "SKI SLOPE" とい  
うのが一般的で、"SKI FIELD" といふのは、クロスカントリーなどの場合にのみ使うと  
私が英会話を習っているカナダ人教師からは聞いたが、ニュージーランドでは、一  
般的なスキーフィールドを "SKI FIELD" の呼び方で通用している。

ともあれ、ニュージーランドでの最初のスキーは、タスマン氷河スキーの前日、マ  
ウントカックへの途中で立寄った、このテカポスキーフィールドで、青く輝くテカポ湖の向こう  
側にCook山を眺めながらのスキーとなつた。

#### その5. マウントカックとタスマン氷河

オーバンドで予約に入れた、タスマン氷河へのバスチケットのフライトをテカポで  
済んで、リコンファームをしないままになってしまった我々は、当日の朝、起きこ  
そく、アルパインガイド、オフィスへと出向いた。“OK”といわれ、安心してユースホステル  
へ戻りゆくりと朝食をとる。

我々がくるまでの約5日間、天候が悪くてセスナ機が飛ばず、タスマン氷河スキーができるか、たといふのがウソのように晴れたり、マウントクック村のエアポートからも Cook 山や、タスマン氷河の下部がはっきりと見渡せるほどだった。

タスマンサドルしまど、マウントクック・エアポートからセスナで約20分、約2400mのタスマンサドルは、さすがに風が強いためだ。我々の担当ガイドは、CHARLES HOBBSというガイドで、我々がスキーリー用のブーツやビンディングを使っているのを見ると“君たちもスキーリーをやるのか”と言ふねえきこと、自分のかぶっている帽子の“SOUTH POLE(南極)”というエンブレムを見せ、“私は南極点へいったんだ”と自慢気に話していた。ちなみに、我々のペアーティーは総合勢12~3人となるが、ガイド以外はすべて日本人ばかりだった。

タスマンサドルからは、雪にかくられたクレバスを避けるために、滑るコースを細かく指定せんながら、約10K、セスナ機のまぐらのダウインフレートと呼ばれるところまで滑った。滑るとはいっても、レベルのすこしずつ違うスキーヤーが、コースを指定せながら、ゆくりと、引つなごく滑るのと、それはまるごとスキーランのようなものだった。

約10Kの1st Run が終わると、タスマンサドルへもどり、食事。サンドイッチ、ピザ、スープ、チョコレート、オレンジジュースなどが出された。2nd Run は、1回目よりも、氷河のより Cook 山側を回るコースで、ICE HALL などを見学しながらの滑降となった。しかし、午前中に比べ、気温もあがり、雪質もあまりよくなくなっていた。

ダウインフレートからマウントクックエアポートへの帰りのフライトは Cook 山直下のアクロバット飛行。体の中の血液が逆さまに流れような錯覚が直りかけた頃にマウントクックエアポートへと着いた。

## 206. ワナカとハリスマウンテン

4時半にマウントクック村を出発し、7時すぎにな、我々はワナカに到着した。宿泊は予定通り、ワナカ・ユースホステル。管理人の年齢不詳の女性から、“You can't understand my English, can you.”といわれ、笑しながら、“I can understand your English.”と言葉を返し、中へと入った。

どこへ行、ても日本人がいたとおぼれとはちがい、やと異国の人々の中にいた、という気持ちになれた。ワナカ YH には、2晚泊まるところにな、たが、同宿の人たちも、日本人と話す機会は珍めどないらしく、和気あいあいとした中で彼らとも話し

をすることがござった。

そして、翌日は、ハリスマウンテンのヘルスキーとなる。ワカの町からやはり車で1時間ほど走ったところに、ヘルポートがあり、個人用の無線機をいつづけたされ、ヘリコプターで山の頂へとあがった。私たちの担当が代は、女性で、我々2人の他にオーストラリア人の夫婦が1組、ハーティーは合計5人であった。前日のタスマン氷河セススキーリングとちがい、この日は、他のハイテイも含め、総勢20人ちかくいたが、日本人は我々2人がけだった。雪質はといえば、すこぶるよく、部分的に悪くなっているところのだけば、2人とも、ハウタースキーの中を、ウェーデルンの気持ちよく滑ることがござった。

結局、1Run 追加して合計 6 Run 滑り、ヘルポートへと戻った。ライトビールをもらい、飲むと疲れが一気にとどけ、体が重く感じられた。

当初の目的であるタスマン氷河とハリスマウンテンを滑りあえた充実感すごい、ぱいだった。明日はすシレ朝寝坊としようなどといいいながら、夜はぐずと眠ってしまった。

## その7. カルドロナとワインズタウン

カルドロナスキー場は、ワカとワインズタウンのちょうど間にある。ガイドブックなどをみると、ワカ周辺には、トリブルコンとカルドロナの2つのスキー場があり、トリブルコンは中・上級 キャー向け、カルドロナはノルディックスキー向けとされている。トリブルコンで滑りたい気持ちもあるが、滑りおえたあと、ワインズタウンへ行きたいという気持ちもあり、カルドロナへと向かった。

国道からスキー場へと曲がる山道で、自動車込み入場料8ドルを払い、カルドロナへと登った。上部はやはり風が強く、少々寒く感じられたが、雪質はすこぶるよく、この日も、気持ちよく滑ることがござった。スキ場の最上部のヒルに登ると、ワカティア湖と、その湖畔にひびかかる街ワインズタウンがみゆたせた。

ワインズタウンでの宿泊も、ワインズタウン YH となつたが、ユースホステルは、ワカティア湖のすぐ湖畔にあり、夕刻、陽が暮れこゆく中で、湖とぼんやりと眺めていると、体の中のモヤモヤしたものが、すべて抜けた、これまでような気分だった。

翌日は、起きる、コロネットヒルスキー場で滑るうと当初考えていたものあまりに疲れがたま、こいに私は、もう滑りたくないと言、2、翌朝は

街の中の観光にしました。今から思うと彼に申し訳ないことをしましたと思ふ。

### その8、帰路。

あちこちご滑りながら、南島を南へ南へと車で走った我々は、クイーンズタウンから途中レタカーと返したオアマリで宿泊し、クライストチャーチまで約1日半かけり帰り、午後のクライストチャーチ発オーカランド行きのAIR NEW ZEALANDへ乗った。

クライストチャーチ発が4時すぎの飛行機だったのだが、フライトをもう少し夕方おおい時刻か夜のものと予約しなければ、当日の朝クイーンズタウンを飛ぶも間にあい、もう一日ゆくりとコロネットヒークあたりでスキーガゼンをいたかもしれない、今は少々悔やんでいる。

「日本に戻りたくない」、「明日から社会復帰できるから配だ。」などと2人で言ひながら、オーカランド発成田行きの飛行機に乗った我々を待つ、こののは、9月になつたとはいえ、とまでもない日本の暑さだった。それに気持ちの良い夢の中から、現実の世界へと強引につれどさるのに充分な程の暑さだった。

### その9、そして今……

我々が滑ったタスマニア河やハリスマウンテンでのスキーを目的とする旅行代理店主催のいわゆる“パッケージ旅行”というものは、もちろん、カタログなどとみると、セスナやヘリコプター料金を別にした、リヤー料金は、65～70万円前後が相場である。それに比べると、我々は、その半額か、それ以下で行っていたことになり、少々得をしたような気もしている。しかし、本当にかかると思ふのは、YHなどを泊まり歩いたりして、日本語の全く通じない若者たちとも交わる機会が持つたことだと思う。

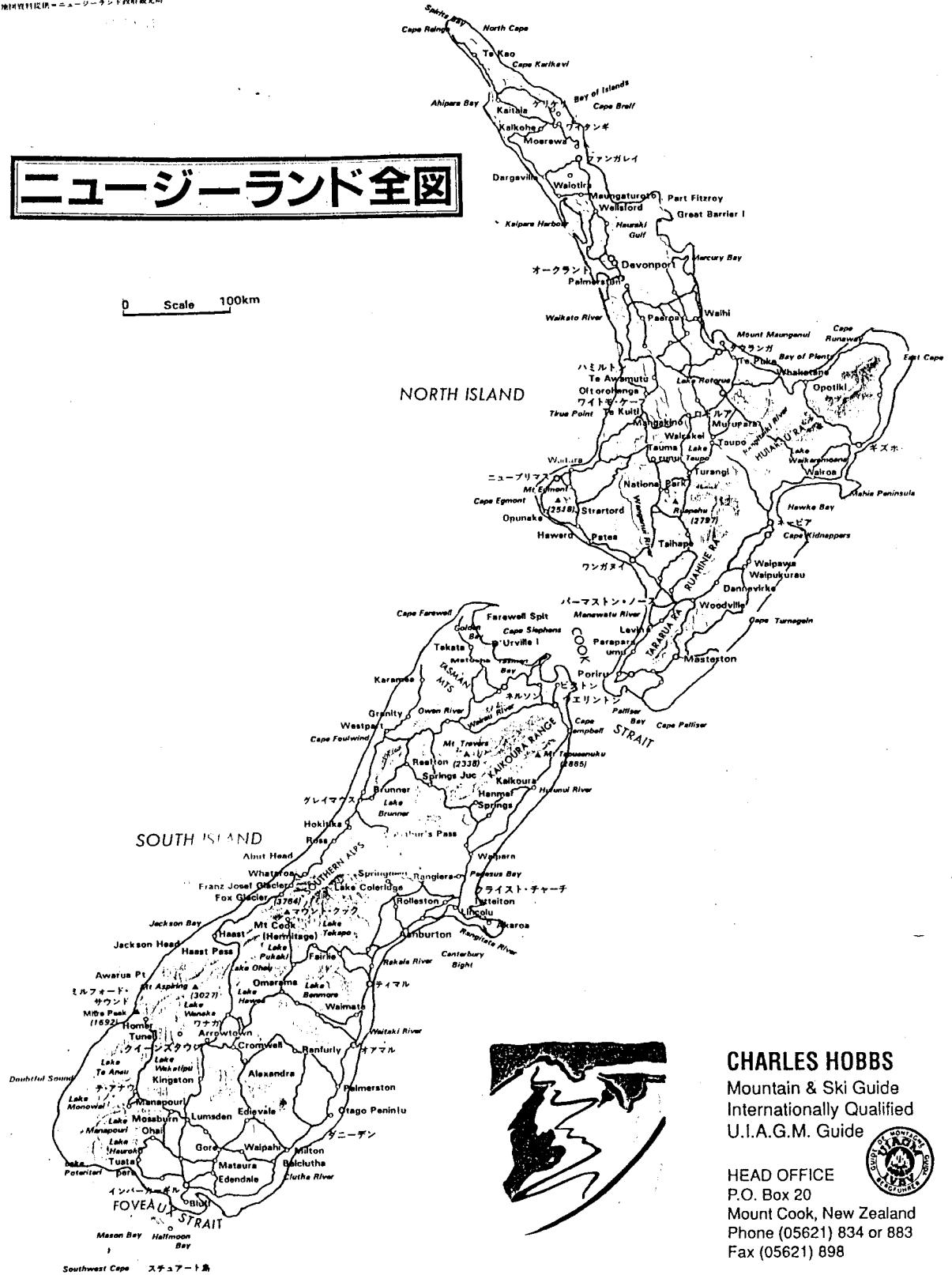
NEW ZEALANDは近いうちに、もう一度行きたい国である。

(清宮・記)

# ニュージーランド全図

Scale 100km

NORTH ISLAND



CHARLES HORRS

**Mountain & Ski Guide  
Internationally Qualified  
U.I.A.G.M. Guide**

**HEAD OFFICE**

P.O. Box 20

## Mount Cook, New Zealand

Phone (05621) 834 or 883

Fax (05621) 898

## ALPINE GUIDES

METHVEN HELISKIING

Phone (03) 302 8108 or 302 8774